



「ひとが育つまち益田」の実現に向けて

「ひとづくり」の取組と若手職員の想い

Vol. 3

市では「ひとづくり」を重要な要素として「ひとづくり推進本部」を設置し、3つの部会で取組を推進しています。

今回は「未来の担い手」部会を担当する協働のひとづくり推進課に所属する若手職員が、取組内容の紹介と「ひとづくり」に対する想いを語ります。

ひとづくりに関するどのような取組を担当していますか

公民館が行う「ひとづくり」につながる地域活動をサポートしています。地域活動に、より多くの世代が関わることで世代間交流が生まれ、その交流が「ひとづくり」の基盤へとつながっています。

また、図書館で毎月第1土曜日に開催される「来ぶらりマルシェ」の支援のほか、図書館前庭と中庭のリニューアルを市民団体と一緒に進めています。「市民との協働」をキーワードに『図書館』本を借りるだけのところ』というイメージの払拭を目指しています。

ひとづくりの取組に対する想いを教えてください

「人口が少ない＝悪いこと」でしょうか。私は市外出身者ですが、益田が大好きです。それは、人口が少ないからこそ、できる素晴らしいことが数多くあるからです。私は「市民との協働」を実践する中で、どん

な活動も益田でなら実現できると感じるようになりまし。これは人口が少ないことの利点だと思っています。「やりたいことを実現できる」ことが益田の魅力のひとつではないでしょうか。そして、その後押しをするのが私達の役割だと思っています。

これからどのような取組でいきたくですか

「益田で楽しく生きる人」を一人でも増やす取組を進めていきたいと考えています。市内にはさまざまな地域活動があり、多くの方が参画しています。まずは地域活動に「参加してみる」ことの楽しさを感じ、さらに「やってみる」ことの楽しさを感じる取組を増やしていきたいです。私も先日、人生初の市民劇に参加して「やってみる」ことの楽しさを体感しました。

今は「やりたいこと」や「やれば実現できること」が多すぎて悩んでいます。その中で、市内には中学生男子のバレーボール部がないことから「男子中学生バレーボール教室」を「やってみる」と決めました。まだ計画段階ですが、バレーボール好きの男子中学生と楽しく関わられたらと思っています。私自身、これからはずっと「益田で楽しく生きる人」でありたいと思っています。

【問】 市政企画課 ☎ 31・0121

日本遺産のまち益田の歩き方

第18回 匹見の山林と匹見川

【問い合わせ先】

益田の歴史文化を活かした観光拠点づくり実行委員会
文責：市文化財課 ☎ 31-0623

匹見の豊かな山林は、はるか昔から多くの人々に恩恵をもたらしてきました。縄文時代には、その豊富な木の実が多くの動物を呼び寄せ、狩猟や採集によって生きる人々にとって、食料の豊富な地域でした。

近代以前から、木材から椀や皿を作る木地師と呼ばれる人々が多く匹見に住んでいました。また、炭焼きで生計を立てたり、副収入を得たりする人々も多かったです。昭和30年代前半の匹見町域には7千人以上の人が暮らしていました。それだけの人口を支える豊かさが匹見の山林にはありました。

中世においても、匹見の山林から切り出される材木が益田の繁栄を支えたと考えられています。世界遺産・宗像大社（福岡県宗像市）・辺津宮の本殿には、天正6（1578）年の再建に際して益田の材木が使われており、匹見の材木と考えられています。また、佐賀県神埼市の櫛田神社にも南北朝時代の遷宮の際に、津和野町須川の材木が使われており、石見の材木がブランド化していた可能性が指摘さ

れています。

宗像大社や神埼市のあたりが、中国などとの貿易における重要拠点であったことを考えると、中国などにも輸出された可能性は十分に考えられます。

奥深い匹見の山の中から、材木はどのように運ばれたのでしょうか。中世においては、材木を川で流す、川下しが行われました。櫛田神社の縁起によると、雨が降らず川下しできなかつたところ、突如大雨が降り、河口まで流すことができたといわれています。材木は匹見川と高津川を使って川下しされたのでした。

匹見ウッドパークでは、こうした匹見の山林の豊かさについて学ぶことができます。

【場】 匹見ウッドパーク

（匹見町匹見イ674）

石見交通バス匹見線
匹見峡温泉バス徒歩5分



匹見の山林と匹見川